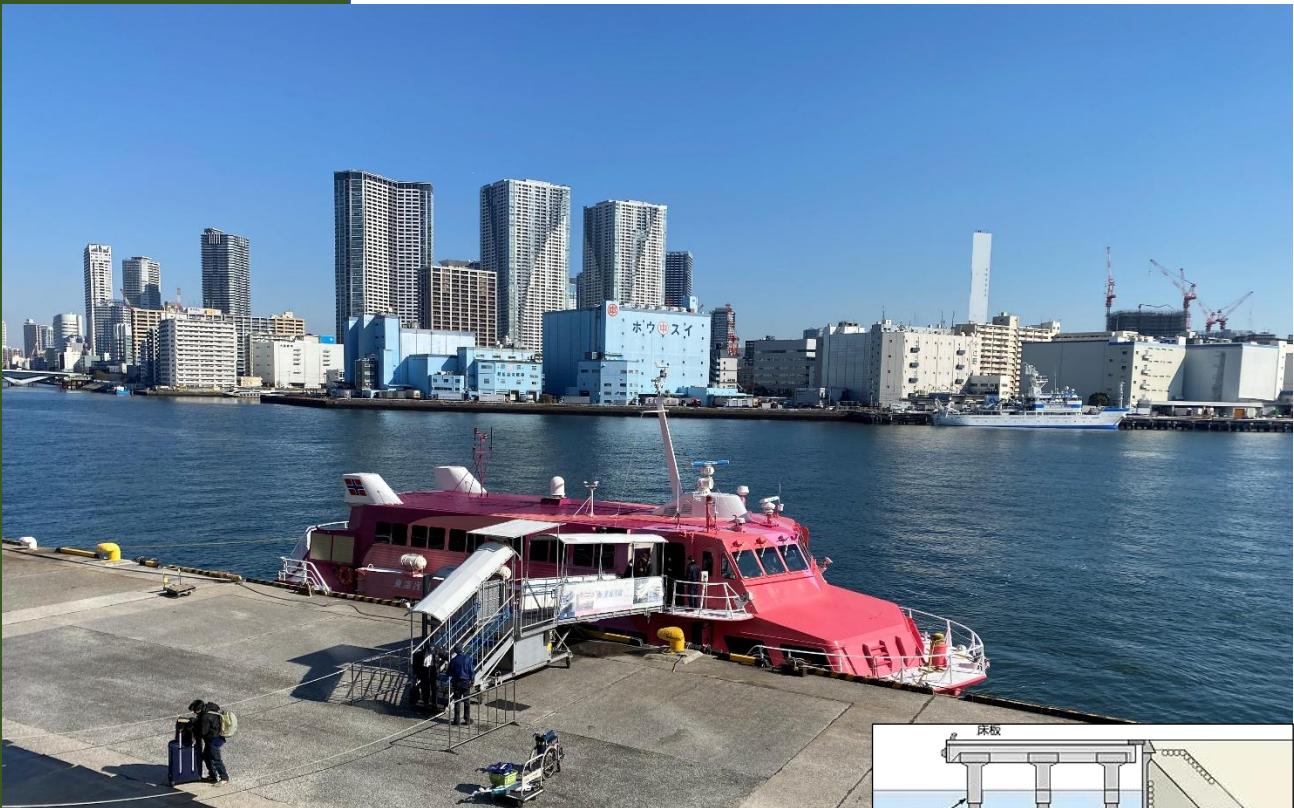


CONTENTS

CNCP 通信

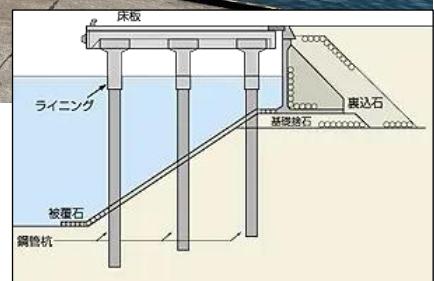
VOL.141／2026.1.5

■今月の土木■



【上】東京・竹芝埠頭から豊海町（埋立地）を望む

【右】一般的な「杭式横桟橋」の構造図
(一社)日本埋立浚渫協会 HP より)



■東京港竹芝埠頭と豊海町

ここは、東京港の竹芝埠頭です。東京都港湾局から委託された東京港埠頭（株）（港湾施設）と（株）東京テレポートセンター（ニューピア竹芝）が管理する施設で、構造形式は「桟橋」。私の学生時代は「竹芝桟橋」の名で知られていました。ここから、東海汽船（株）の船が、伊豆8島と熱海・館山などに行きます。写真の船は、伊豆5島と熱海・館山に行くジェットフォイル「セブンアイランド」で、水中翼が常に沈む「全没翼型水中翼船」という波浪中でも動搖しない構造です。（写真の赤い「セブンアイランド愛」は2025年8月に引退）

向こうに見えるのは、中央区豊海町。江戸時代の佃、明治の月島、大正の勝ちどき、昭和の晴海・豊海と続いた一番新しい埋立地で、港湾地区のほかに魚類冷凍・冷蔵倉庫が林立しています。

この水域は、東京港で、隅田川の終端は、左端に小さく側径間が写っている「築地大橋」の向こうです。
(CNCP 常務理事：田中努)

▼年頭の挨拶

- ・「適疎な地域づくり」を深掘りする一市民の参加と協働のデザインを念頭に－

：山本卓朗

▼土木と市民をつなぐ活動

- ・土木の見方を変えて、味方を増やす～「広告業界出身の土木偏愛者」の活かし方～
：小川慎太郎

▼社会課題への取組み

- ・国際憲章「泳げる都市の川」—Swimmable Cities—：三井元子

▼イベント案内

- ・あらかわ学会年次大会
2025 募集開始！：三井元子

▼事務局通信



▼メッセージ

年頭の挨拶

「適疎な地域づくり」を深掘りする 一市民の参加と協働のデザインを念頭に—

(特非) シビル NPO 連携プラットフォーム 代表理事

山本 卓朗



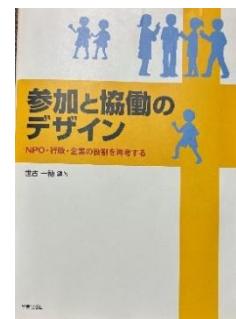
明けましておめでとうございます。

2025 年も何かと目まぐるしい一年でしたが、その中で、NPO 法人 シビル NPO 連携プラットフォーム：CNCP は、土木学会の 100 周年記念事業の一つとして立ち上げて以降、多くの皆様にご支援を頂きながら、ささやかながら「土木と市民社会をつなぐ」活動を続けられたことに心から感謝申し上げます。中間支援組織としての活動は試行錯誤の連續ですが、今は「プラットフォーム事業」を一つのかたちとして、幾つかの事業を支援推進することに注力しています。その一つである全国の高専生をターゲットにした通称インフラテクコンは大きく飛躍しましたし、適疎な地域づくりもすこしづつ知名度を高めるべく努力を続けています。

さて、適疎な地域づくりについては、三年連続で CNCP 通信の年頭の挨拶で取り上げ、HP に特別サイトを設けるなど、聞き慣れない適疎という言葉への理解促進を図ってきました。今年は、議論の深掘りを目指して、CNCP 会員の活動との繋がりをご紹介しつつ、以下 3 点を取り上げます。

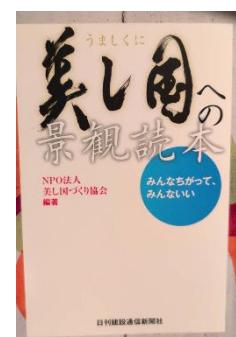
●適疎な地域づくりと市民協働の関わり

HP の地域づくりのサイトで 100 事例を掲載しましたが、そのかたちは、行政主導、企業主導、住民主導など様々です。しかし総じて、市民・住民の参加が低調なプロジェクトは、活発に欠けるような気がします。阪神淡路大震災以降、活発になってきた市民活動を受けて、1998 年に NPO 法ができましたが、未だ市民社会の活動を支える基盤は脆弱で多くの課題を残していると思います。このあたりについては、当 NPO 法人の理事であり、長年に亘り“参加協働型の市民社会構築”に情熱を燃やしてこられた世古一穂さんの著書、「参加と協働のデザイン」学芸出版社 2009.10 をお読み頂きたいと思います。



●適疎な地域づくりと景観との関わり

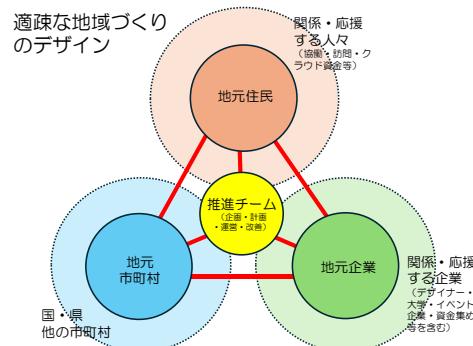
研究会で適疎な事例を探し、適疎って何？という議論を重ねる中で、大都会の模倣ではなく、その地域の持つ多様な特色を活かすことが、最も大切では？という至極当たり前の考えに納得しているところです。地域のポテンシャルを考えるとき、ふるさとの景観保持再生も大事な要素の一つです。景観については、当会の法人会員である NPO 法人 美し国づくり協会編著「美し国への景観読本」日刊建設通信新聞社 2018.5 (CNCP 通信 2025 年 3 月 Vol.131 で紹介) に多くの示唆があります。特に大正時代の童謡詩人金子みすずさんの詩を引用した“みんな違ってみんないい”は、多彩な適疎地域のイメージに重なります。



●適疎な地域づくりデザインに向けて

さて、それでは具体的に私たちがある地域づくりに関わるとして、どのような体制で臨むべきでしょうか。市民・住民の参加と協働を念頭に、“三つの輪”でイメージしてみたいと思います。三つの輪をどう構想するか、まだ研究会で議論中ですが、モデルとして、田中努理事が考案した図を記載しますので、イメージを膨らませて頂きたいと思います。

本年もよろしくお願ひします。



▼土木と市民をつなぐ活動

1億2千万人の土木ユーザーに伝わる広報を
土木の見方を変えて、味方を増やす

～「広告業界出身の土木偏愛者」の活かし方～

土木学会 2023年度会長特別プロジェクト 魅力ある土木の世界発信小委員会

土木学会 Web 情報誌「from DOBOKU」副編集長

株式会社ドボクのミカタ 代表取締役

小川 慎太郎



■伝わらなければ、存在しないのと同じ

私は、もともと20数年間、広告業界の端っこで企画やマーケティング関連の仕事をやっていました。毎日のように、「この商品がどうすれば売れるか?」、「もっと知ってもらうためには?」を考え、企画、実施する仕事です。

今から11年前、知り合いの土木技術者から市民向けイベントを手伝って欲しいという依頼を受けたことがきっかけで、土木の価値と魅力に惹かれ、今では“日本初・土木広報専門会社”を経営し、「広告業界出身の土木偏愛者」として、広報分野のお手伝いをしています。

詳しい自己紹介や経緯などは[こちらをご覧ください。（<https://dhn.jp/1073-2/>）](https://dhn.jp/1073-2/)



当時はまだ“土木広報”という言葉を使っていないような時代で、広報に対して積極的ではないどころか、ネガティブな雰囲気さえありました。

一方で、担い手不足の課題は顕著になってきており、土木業界のみなさんからは「若者に人気がない」、「もっと土木のことを知って欲しい」という声を耳にしていました。

現実はシンプルで、伝えようとしてこなかったため、良くも悪くも何も伝わっておらず、結果として、市民の中に「土木」というものが存在していないのと同じ状況に陥ってしまったのです。

■第三者の視点で寄り添い、つなぐ

土木の価値と魅力が正しく、楽しく伝わるために、10年前から土木広報に関する活動に注力してきた私ですが、広報の専門家であると同時に土木偏愛者でもあります。一般市民と土木関係者を足して二で割らない…そんな特異な存在であるからこそ、双方に寄り添い、双方をつなぐ活動を大切にしています。誌面の関係で簡単ですが3つだけ紹介します。

1. YouTube チャンネル「ドボクのミカタ」



(<https://www.youtube.com/@dobokunomikata>)

普段、目にする機会の少ない現場やそこで活躍する人にフォーカスし、動画で発信しています。また、土木×歴史、土木×旅などの切り口で、一般市民向けコンテンツを発信しています。お陰様でこの活動を評価していただき土木学会の「土木広報大賞 2023」にて表彰していただきました。

2. 土木学会 2023 年度会長特別プロジェクト「土木の魅力向上プロジェクト」



「自分の言葉で土木の魅力を語ろう」のショート動画 (<https://www.tiktok.com/@dobokutv>)

「自分の言葉で土木の魅力を語ろう」というテーマで、100本近いショート動画の制作に携わりました。会長特別プロジェクトにおいて、“広報”をメインテーマにしたこと自体に、とても大きな価値があつたと考えていますし、そのような機会に参画させていただいことは、とてもいい経験となりました。

3. 広報コンサルティング

普段の業務紹介のよう恐縮ですが、土木業界の企業、団体向けに広報に関するコンサルティング活動をおこなっています。



範囲は多岐に渡り、広報計画立案、広報ツールの制作、プレゼン研修、講演など、広報に関わる全てに関して、土木業界の皆様と一緒にになって課題解決に取り組んでいます。

その際も第三者の視点を大切にし、企業(団体)と地域、企業(団体)と若者をつなぐことを目指しています。

■バタフライ・エフェクトを起こそう

「広報」というと、どこか難しそう、失敗できない、キラキラしているという印象を抱く方も多いようですが、実はそんなことはありません。

もし、あなたが誰かと仲良くしたいと思ったらどうしますか？

相手を調べる？ 話かける？ 自分のことを知ってもらう？ 共通の話題を見つける？

様々なアプローチがあると思いますが、いずれにしても最初の一歩は“ちょっとしたこと”から始まります。

広報も同じです。最初から高い理想を掲げたり、高度なことをやろうとしたり、ハードルを上げすぎて結局頓挫してしまっては全く意味がありません。

最初は「小さな一歩」からはじめてみて、継続することが重要だと考えています。

土木業界全体が広報を自分ごと化し、「小さな一歩」を踏み出すことで、バタフライ・エフェクトを起こし、日本全国 1 億 2 千万人の土木ユーザーに土木の価値と魅力が伝わることを願っています。

<土木広報に関するご相談は>



株式会社ドボクのミカタ 小川慎太郎 ogashin@dnm.jp
(<https://dnm.jp/>)



▼土木に関わる人と活動／社会課題への取組み

国際憲章「泳げる都市の川」

— Swimmable Cities —

日本河川協会 理事
NPO 法人あらかわ学会 事務局長
三井 元子



1. はじめに

2023年11月号 Vol.115に「泳げる荒川の復活をめざして」というコラムを書く機会を得て、東京を流れる大河川、荒川（放水路）での遠泳大会を同年9月に開催した経緯をお話ししました。荒川下流部は、明治の終わりに何度も大きな洪水に見舞われたため、北区岩淵で分岐して広い川を作り海へ流す計画を立て、19年かけて川幅500m、延長22kmの放水路が完成しました。完成の1930年（昭和5）には、放水路沿いに12か所以上の水練場ができ、水泳指導者がこどもたちに水泳を教え、競技や遠泳大会をして楽しんでいたといわれます。1938年（昭和13）頃から戦争が激しくなり、終戦後は復興景気と共に水質汚濁が進んで、泳げない状態が約80年も続いていました。しかし、近年では水質も向上して、水浴場の指標に使われるふん便性大腸菌群も低い値になっていたことから、NPO 法人あらかわ学会が遠泳大会復活を提起したのです。



2. 荒川遠泳大会の復活

2023年9月16日、プレ大会として川泳ぎに慣れている方たち11人で850mを泳いでみたところ、水質は良好、気持ちよく泳げました。そこで、11名で実行委員会を立ち上げ、本大会の準備に入りました。

2024年9月14日、公募に応じた37名と共に1500m遠泳大会を実行し泳ぎ切りました。パトロール艇2艇、伴走艇2艇、Eボートによる応援や陸支援などの32名がこれを支えました。

あらかわ学会が、遠泳大会復活をめざしたのは、川中に関心を持つ人々を増やしたいと思ったからです。荒川が再び泳げる水質にまで回復したことを共に喜び、さらに川をきれいにしていくにはどうしたら良いのかを考える人々を増やしたいと思っています。



その後、朝日新聞 SDGs アクションのデジタル記事「地域を再生するアーバンスイミング 世界での流行とニューヨークの最新事例を紹介」を目にした機会があり、世界の都市で泳げる川にするための運動が進んでいることを知りました。さらにその記事で「泳げる都市の川運動」が起こっていることも知

り、大変興味を持ちました。目的とする処があらかわ学会と同じと思ったのです。

※ [地域を再生するアーバンスイミング 世界での流行とニューヨークの最新事例を紹介：朝日新聞 SDGs ACTION!](#)

この団体は Swimmable Cities コレクティブという名称で 2024 年 7 月、国際憲章を提起して、多くの国の都市や市民団体がこれに加盟しました。「泳げる都市」を増やしていくというムーブメントです。この団体の共同代表は、オーストラリア、フランス、イギリス、ドイツ、アメリカから参加しています。2025 年 6 月には、オランダのロッテルダム市と共に一般公開された初回のロッテルダムサミットを開催し、3,000 人が参加しました。このサミットは国連生態系回復 10 年の一環として開催されたものです。代表はインタビューに答えて、「川の健康は地球全体の健康にとって不可欠です。川は文化的なステークホルダーであり、社会的な活性化役であり、皆が集まる場所です。さらに重要なのは、活気ある生態系を維持し、水生生物にとって重要な生息地を提供し、生物多様性の保全に寄与していることです。[健康な川は、気候変動への防御手段となり、費用対効果の高い洪水対策と清潔な水へのアクセスを提供します](#)」と話しました。

※ [水泳の都市国際運動は、都市の水路で泳ぐ権利を支持しています - 建築デザイン装飾](#)

3. あらかわ学会、国際憲章 “Swimmable Cities” に加盟！

2025 年度の荒川遠泳大会は 9 月 6 日に予定されていましたが、前日に台風による降雨があったため、やむなく中止となりました。しかし、9 月 1 日、Swimmable Cities の共同代表であるドイツの Tim Edler 氏から連絡があり、日本で同じような目的で活動している団体があれば来日の際に会いたいと言って来ました。9 月 10 日、江東区の船番所資料館会議室で話し合いの場を持ち、意見交換をし、意気投合しました。

そこで、11 月のあらかわ学会理事会で、Swimmable Cities に加盟することを決定し、2025 年 12 月 20 日正式に加盟団体として登録されました。日本の加盟団体第 1 号です。世界とつながりながら、Wellbeing な荒川を目指していきたいと思っています。

※[Swimmable Cities • Urban Swimming Culture](#)



Tim Edler さんと実行委員会メンバー

Swimmable Cities ,国際憲章の 10 の共通原則

1. 泳ぐ権利	6. 水泳場における民主的参加
2. 自然の権利（ワンヘルス）	7. 再接続と回復力
3. 都市水泳文化	8. 新たな経済的機会
4. 水は神聖である	9. ウェルビーイングの利益、文化、知識の共有
5. ルールの書き換え(方針)	10. 今日、明日、そして未来の世代のための管理

▼イベント案内

あらかわ学会年次大会 2025 募集開始！

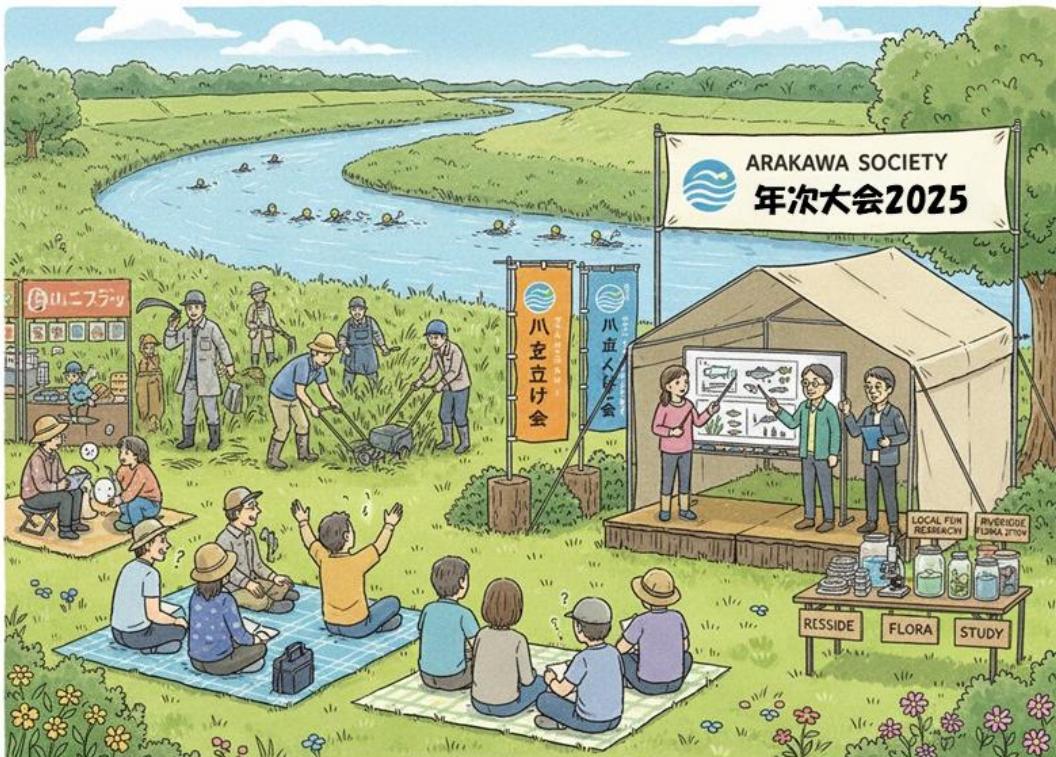


NPO 法人あらかわ学会 事務局長
三井 元子

あらかわ学会年次大会のお知らせです。論文発表ができますし、聴講も無料です。

・あらかわ学会：<https://arakawa-gakkai.jp>

第30回記念 論文発表者募集中！
あらかわ学会年次大会2025



2026年2月15日（日）綾瀬プレミア第2洋室

10:30~18:00

大人も子どもも、官も民も15分で発表し、みんなで話し合います
より良い荒川をめざして、研究論文、体験活動、提案を発表しましょう



申込フォームURL：<https://forms.gle/nyigRiVAC5xCPajk6>

募集要項は以下のHPからご覧ください。

[あらかわ学会年次大会2025 募集開始！ | 特定非営利活動法人「あらかわ学会」](#)

★年次大会論文集は、独立行政法人科学技術振興機構 <http://opac.jst.go.jp> 年次報告部門で文献登録

★国立国会図書館、都立図書館、公益社団法人全国市有物件災害共済会防災専門図書館に保管されています。

主 催	特定非営利活動法人 あらかわ学会 info@arakawa-Gakkai.jp
後 援	(申請中)国土交通省荒川上流河川事務所、国土交通省荒川下流河川事務所 埼玉県、戸田市、川口市、板橋区、北区、足立区、墨田区、荒川区、葛飾区、江戸川区、江東区

▼事務局通信

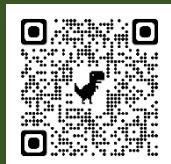
CNPC は、
あなたが参加し、
楽しく議論し、
活動する場です。

お問い合わせは下記まで

特定非営利活動法人
シビル NPO
連携プラット
フォーム

●登録事務所
〒110-0004
東京都台東区下谷
1丁目 11 番 15 号
ソレイユ入谷

事務局長 田中 努：
cncp.office@gmail.com
ホームページ URL：
<https://npo-cncp.org/>



■12月の実績

●第 140 回経営会議

開催日・場所：12月 9 日（火）Zoom 会議

議題：各事業の進捗確認／適疎な地域づくり研究の進め方

■1月の予定

●第 141 回経営会議

開催日・場所：1月 20 日（火）アイセイ(株) 会議室

議題：各事業の進捗確認／理事会の準備／適疎な地域づくり研究の進め方

■2月の予定

●第 142 回経営会議

開催日・場所：2月 10 日（火）Zoom 会議

議題：各事業の進捗確認／理事会資料と内容の確認

●第 2 回理事会

開催日・場所：2月 24 日（火）Zoom 会議

議題：上期の活動実績／下期の活動計画

■現在の会員と仲間の数

●会員：賛助会員 30／法人正会員 8／個人正会員 22／合計 60

●仲間：サポーター 95／フレンズ 141／土木と市民社会をつなぐフォーラム 15／インフラパートナー 18／合計 269

●CNCP の活動には下記の賛助会員の皆さまのご支援をいただいています（五十音順・株式会社等省略）。

アイ・エス・エス／アイセイ／安藤・間／エイト日本技術開発／エヌシーアー／奥村組／オリエンタルコンサルタンツ／ガイアート／熊谷組／建設技術研究所／五洋建設／佐藤工業／シンワ技研コンサルタント／スバル興業／セリオス／第一復建／竹中土木／鉄建建設／東亜建設工業／東急建設／ドーコン／飛島建設／土木学会／西松建設／日本工営／パシフィックコンサルタンツ／フジタ／復建エンジニアリング／復建調査設計／前田建設工業（以上 30 社）



土木と市民社会を インフラパートナー
つなぐフォーラム
JSCE 土木学会

